

平成27年奄美市の防災教育を考えるシンポジウムに参加して

～学校での実践的安全教育を地域に広げる取組～

研究主任 教諭 兼 箇段 賢

はじめに

県立学校20校が海拔10m未満にあり、平成26年度に学校防災対応システム（緊急地震速報装置）が設置された。本校は学校防災システムを活用した、より効果的な避難訓練の実施と安全確保体制の確立に努め、防災に関する基礎知識や避難経路・避難場所の検証と確立を図り、効果性のある避難訓練の充実に努めるとともに災害時における的確な避難誘導や児童生徒等の保護者等への安全な引渡し等の確立などの取組を各学校へ発信することを目的とする研究指定を受けた。

研究内容

- (1) 防災教育に関する実践的研究
- (2) 防災に関する講演会
- (3) 先進校視察（地域ぐるみでの防災訓練実施地域）
- (4) 校内研修
- (5) 学校防災リーダーを中核とし、地域関係機関と連携した学校防災システム等の活用による避難訓練準備及び実践

今回、①学校防災システムを導入している②小中学校で取り組んでいる③地域との連携を図っており、本校の研究指定校と似た状況であったので先進校視察を奄美市のシンポジウムに参加する事とした。



鹿児島空港からプロペラ機でのフライトで奄美大島に降りた。空港から奄美市の名瀬中央公民館まで車で約50分かかったが、目に映る景色は沖縄らしさと本土の雰囲気混ぜ合わせたような感じで興味深く映った。

シンポジウムでは、まず奄美市防災キャンプ実践事例を中学生が発表、内容は地域防災マップの作成、避難所での炊き出し、避難所生活模擬体験、非常時のトイレ作製であった。

次に福島レポートとして南日本新聞オセモコ特派員として復興しつつある福島県で被災体験や避難所生活を続ける人などから話を聞いたことを中学生から紹介があった。

更に緊急地震速報装置を利用した避難訓練について株式会社センチュリー石井良一様から説明があった。本校も設置しているシステムであり機能の再確認が出来た。特にショート訓練機能を有効に活用し地震発生前の一次動作（頭を守る・身を守る・避難経路を確保する・安全な場所へ避難する）を訓練できる機能と県外の公共施設や大型ショッピングモール等では導入されているシステムであり、本校生徒達が県外で生活した場合でも、システムから発報される警報音にも慌てることなく冷静に対処できる能力が身につくと考えられる。また、ショート訓練は場所を

選ばず、所要時間も5分から10分で訓練が可能である。メリットは時間帯や事前準備に関係なく警報音を覚えやすいなどがある。デメリットとしては、①避難行動の確認が困難②慣れへの対応が必要③警報音を発する為、近隣住民への理解が必要である。

講演として東日本大震災の避難所での生活について岩手県山田町婦人団体連絡協議会会長の野田和子さんから生々しい震災直後の出来事や避難所生活での日々の様子を聞くことができた。

震災を経験して言えることの一つに非常用持ち出し袋に①保険証②お薬手帳が必要と感じたこと。避難所生活ではリーダーシップをとれる人と協力できる仲間達が必要で厳しい避難所生活を強いられると些細な事から揉め事も起こった。

最後に名瀬測候所職員や鹿児島大学理工学研究科、奄美市総務課、各学校長など様々な分野の方々と中学生から活発な意見が飛び交うパネルディスカッションが行われ幕を閉じた。



～ シンポジウムパネリストや講演者、発表者から印象に残った言葉 ～

- ・福島県を視察した際に被災者から『命があつて当たり前ではなくありがたいこと。命があることは奇跡』
- ・震災・避難所生活を経験して『自然災害が発生したことを想像するには知識が必要。知ることでも困らなかつたり助かつたりすることもある。自分の目で見たり、知ることの大切さを実感した』
- ・大川小中学校校長、ショート訓練を通して『同じパターンではなく、いろんなケースを想定して訓練することで、様々な課題が出る。次回以降に課題を改善して、訓練を繰り返すことで、子どもたちが自分の命を守ることを考えて行動できるようにすることが大切』
- ・東日本大震災から『家族で避難場所の確認、どこで会うのか確認しておくことが必要』
- ・地域の防災について『お互いが顔を出し、住民同士が顔の見える関係作り、顔が知っているつながりが大切』

